

失敗に対する反応に自尊感情が及ぼす影響

黒 川 光 流

富山大学人文学部紀要第 75 号抜刷

2021 年 8 月

失敗に対する反応に自尊感情が及ぼす影響

黒 川 光 流

問 題

集団では、メンバーそれぞれに役割が付与され、メンバーはそれに応じた課題を遂行している。各メンバーが課題遂行に成功し、それらが組み合わせられることで、集団全体としての成果は高まる。しかし、個々のメンバーの課題への取り組みが常に成功するとは限らず、目標とするレベルに遂行結果が到達しないこともある。行為の結果が当初の目的に達しない、あるいは望ましくないものとなることは失敗と呼ばれる（池田・三沢, 2012）。失敗を経験することは、自己の学習や成長につながる可能性があることが指摘されており（Edmondson, 2004）、課題遂行に失敗することが、直ちに個人や集団全体に否定的な効果のみをもたらすとは限らない。しかし失敗の繰り返しは、動機づけの低下（Dweck & Reppucci, 1973）、無力感（Seligman, 1972）、あるいは抑うつ症状（Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978）をもたらす危険性があることも同時に指摘されている。

失敗の原因を、自己の努力不足や課題への取り組みの拙さなど、内的で統制可能なものに帰属する者は、自己の行動を改善するように対処する傾向がある一方、課題の困難さや運など、外的で統制不可能なものに帰属する者は、行動の改善よりも失敗から注意を逸らすことで対処する傾向があることが示唆されている（三宅, 2000）。また、大学生が学業場面での失敗を経験したときにネガティブな感情が喚起されると、後に同様のネガティブな感情を経験しないように、可能な限り失敗を克服しようとすることが示唆されている（池田・三沢, 2012）。すなわち、失敗を経験してもそれを繰り返さないためには、原因を適切に把握し、その事実を受け止め、行動を改善するように対処する必要がある、それによって失敗がもたらすネガティブな効果は抑制され、自己の学習や成長につながるのではないかと考えられる。

人は失敗をどのようなものとして受け止め、捉えようとするのかについて、池田・三沢(2012)は失敗観尺度を作成して検討している。失敗には、ネガティブな感情を喚起させるものとして捉える「失敗のネガティブ感情価」、学習の機会として捉える「失敗からの学習可能性」、可能な限り避けたいものとして捉える「失敗回避欲求」、および不可避に発生しうるものとして捉える「失敗の発生可能性」という4つの捉え方が示されている。また失敗への対処行動は、失敗を引き起こした原因を直視し、それを克服しようとする積極的対処行動と、失敗から目を背け、ネガティブな感情を調整する消極的対処行動の2つに分類されている（三宅,

2000)。自力では失敗への対処が困難であっても、他者の力を借りれば問題を解決できることもあり、他者に援助を要請することも、失敗への対処行動の1つとして捉えることができるだろう。

課題遂行の結果と当初の目的との乖離の程度が大きいほど、あるいは遂行結果が望ましくないものであるほど、大きな失敗であることを意味し、そのインパクトは強くなるだろう。つまり、大きな失敗であるほど、自らの力の無さを感じ、失敗をネガティブなものとして捉え、積極的に対処しようとはしなくなると考えられる。しかし、多くの人は気にしないような些細な失敗をいつまでも引きずり、くよくよする人がいる一方で、大きな失敗でも気にかけない人もいる。同程度の失敗を経験したとしても、その原因帰属や捉え方、あるいは対処行動には個人差が見られるのである。

失敗に対する原因帰属や対処行動の個人差を説明する要因の1つとして、特性的自己効力感の効果が三宅(2000)によって検討されている。特性的自己効力感の高い者は、失敗を努力や取り組み方といった内的で統制可能な原因に帰属し、積極的に対処行動を行うが、特性的自己効力感の低い者は、失敗を課題の困難さや運などの外的で統制不可能な原因に帰属し、消極的に対処行動を行うことが示されている。このことから、失敗に対する原因帰属や捉え方、あるいは対処行動には、行為の結果だけでなく、行為者である自分自身をどう捉えているかが影響していることが推測される。ただし、自己効力感の一部は、過去の成功経験に基づいて形成される(Bandura, 1977)。そのため、これまでに経験のない不慣れな課題では、その効果は限定的であることが予想される。そこで本研究では、自己効力感より概念的に広範に自己の肯定的側面を捉えている自尊感情に着目する。また、自尊感情は高さだけでなく、その不安定性の重要性も指摘されている。自尊感情の不安定さは、自己価値が他者との比較や外的基準に依拠する程度に規定されるのだが、外的基準以外に注意を向けることを妨げ、自身の欠点を直視して自己全体を向上させようとする意欲を阻害するとの指摘もある(Crocker & Park, 2004)。

自尊感情が低い者はネガティブな出来事をそのまま自己に取り入れてしまうため、ネガティブな感情を喚起しやすい一方、自尊感情が高い者はネガティブな出来事から距離をとり、ネガティブな感情を喚起しないように対処できることが示されている(調・高橋, 2002)。このことから、自尊感情が低い者は、高い者よりも失敗の原因を内的に帰属し、失敗をネガティブなものとして捉え、消極的に対処することが予想される。また、自尊感情が不安定な者は、出来事に対する感受性が高いことが示されている(中間・小塩, 2007)。このことから、自尊感情が安定している者と不安定な者とは、自尊感情の高さの効果が異なることが予想される。

自尊感情が高く、しかも安定している者は、自尊感情を回復させるために話を聞いてくれる他者や気晴らしをしてくれる他者を求めるが、自尊感情は高くても不安定な者は、他者からの評価を回避しようとすることが示されている(市村, 2011)。他方で、自尊感情が低く安定し

ている者は、自尊感情を回復させるための行動をあまり行わないが、自尊感情が低く不安定な者は、他者からの受容を求めることが示されている（市村, 2011）。さらに、自尊感情が安定している場合には、自尊感情が高いほど援助要請を多く行う一方、自尊感情が不安定な場合には、自尊感情が低いほど援助要請を多く行うことも示されている（脇本, 2008）。このことから、自尊感情が高い場合には自尊感情が安定している者の方が、自尊感情が低い場合には自尊感情が不安定な者の方が援助要請を多く行うことが予想される。

以上のことから本研究では、自尊感情の高さに加え、自尊感情の不安定性が失敗に対する原因帰属や捉え方、ならびに対処行動に及ぼす影響を検討することを目的とする。

方 法

実験参加者

大学生 104 名（平均年齢 20.4 歳, $SD=1.4$, 男性 47 名, 女性 57 名）が実験に参加した。

実験計画

自尊感情の高さ 2（高・低）×自尊感情の不安定性 2（高・低）の 2 要因実験参加者間計画であった。

自尊感情の高さ Rosenberg(1965)の自尊感情尺度邦訳版（山本・松井・山成, 1982）10 項目のうち、伊藤・小玉(2005)の研究で極端に因子負荷が低いことが示された「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を除いた 9 項目を用いて測定した。

自尊感情の不安定性 自己価値の随伴性尺度（伊藤・小玉, 2006）15 項目を用いて測定した。

自尊感情の高さおよび不安定性のいずれも、「1: 全くあてはまらない」から「5: 非常にあてはまる」までの 5 段階で回答を求めた。

課題

課題は、目隠しをした状態で、約 8 フィート離れた距離に置かれた箱を狙って、非利き手を使ってボールを 1 個ずつ、10 回投げるというものであった。箱の大きさは縦・横約 30cm, 高さ約 40cm であり、上面が開いていた。ボールは直径 40mm のピンポン球を使用した。

実験の目的は「アメリカで 1990 年代に行われた研究の追試であり、視覚情報と身体運動との関連について検討すること」であり、「実験参加者が目隠しをする条件と、実験参加者と箱との間に衝立を置く条件の 2 つがある」と、実験参加者に偽って教示した。次に練習として、実験参加者に、目隠しをせず利き手で 3 回ボールを投げてもらった。練習終了後、2 枚のカードから 1 枚を選ぶことで、最初にどちらの条件を実施するかを決めてもらおうと実験参加者に告

げ、偶数が書かれたカード1枚、奇数が書かれたカード1枚を裏返し、実験参加者に選んでもらった。実際には、目隠しをする条件しか実施しないため、どちらのカードを選択しても「目隠しをする条件から実施する」と実験参加者に伝えた。

課題に先立って、目隠しした条件で箱にボールが入った数の平均は、アメリカで行われた研究では4.91個であったと実験参加者に伝えた。課題実施中、ボールが箱に入った場合にはチャイム音、入らなかった場合にはブザー音でフィードバックを行うと実験参加者に伝えたが、ボールが箱に入ったか否かに関わらず、10球中0-2球ボールが箱に入ったというフィードバックを行うことで、実験参加者に失敗を経験させた。

従属変数

原因帰属 三宅(2000)の原因帰属尺度を参考に、内的・統制可能な原因として「課題への取り組み方が悪かった」および「努力が足りなかった」の2項目、内的・統制不可能な原因として「自分の能力が足りなかった」の1項目、ならびに外的・統制不可能な原因として「自分にとっては課題が難しかった」、「たまたま運が悪かった」、および「実験者の教示の仕方が悪かった」の3項目を用いた。

失敗の捉え方 池田・三沢(2012)の失敗観尺度を参考に、失敗のネガティブ感情価として「今回の結果で自己嫌悪に陥ってしまった」、「今回の結果で悲しい気持ちになった」、および「今回の結果は後々まで気になってしまう」の3項目、失敗からの学習可能性として「今回の結果は前に進むための原動力になった」、「今回の結果を乗り越えることで成長できる」、および「今回の結果で一度むけることができた」の3項目、失敗回避欲求として「今回の結果はあってはならないことだ」、「今回の結果は決して起こしてはいけないことだ」、および「今回の結果は決して許されないことだ」の3項目、ならびに失敗の発生可能性として「今回の結果は頻繁に起こることだ」、「今回の結果は当たり前前に起こしてしまうものだ」、および「今回の結果はよくあることだ」の3項目を用いた。

対処行動 三宅(2000)の対処行動尺度を参考に、積極的対処行動として「今回のような成績になった理由をはっきりさせたい」、「次に行う課題にどう取り組んだらいいか、対策をよく考えたい」、および「次に行う課題では今回よりももっと努力しようと思う」の3項目、ならびに消極的対処行動として「何か気晴らしになることをしたい」、「嫌なことなのであまり深く考えないようにしたい」、および「次に行う課題にできれば参加したくない」の3項目を用いた。援助要請については、田村・石隈(2001)の被援助志向性尺度を参考に、「次に行う課題で良い結果を得るために、自分と一緒に対処してくれる人がほしい」、「次に行う課題で良い結果を得るために、他者からの助言や援助がほしい」、および「次に行う課題は人に頼って解決したい」の3項目を用いた。

課題遂行の結果の操作チェック 「課題遂行の結果は自分にとって望ましいものであった」という項目を用いて操作チェックを行った。

原因帰属，失敗の捉え方，対処行動，および操作チェックの項目いずれも，「1: 全くあてはまらない」から「5: 非常にあてはまる」までの5段階で回答を求めた。

手続き

各実験は，実験参加者1名ずつに実験室に来てもらい実施した。まず，実験参加者は自尊感情の高さおよび不安定性を測定する尺度に回答した。次に，偽りの実験の目的が伝えられ，課題の説明がなされた後，実験参加者は練習を行った。その後，先行研究での平均成功数に関する偽りの情報が伝えられ，実験参加者は課題に取り組んだ。課題遂行時に結果についての偽りのフィードバックを行うとともに，課題終了後には箱に入ったボールの数について偽りのフィードバックも行った。課題終了後，実験参加者は従属変数の測定および操作チェックのための質問調査票に回答した。最後にディブリーフィングを行い，実験を終了した。所要時間は各実験約20分であった。

結 果

自尊感情の高さおよび不安定性による群分け

自尊感情の高さの指標は，自尊感情尺度9項目への回答の合計を用いた。自尊感情の高さが，理論的中央値27より高い実験参加者を高群，27以下の実験参加者を低群とした。また，自尊感情の不安定性の指標は，自己価値の随伴性尺度15項目への回答の合計を用いた。自尊感情の不安定性が，理論的中央値45より高い実験参加者を高群，45以下の実験参加者を低群とした。

各群の自尊感情の高さおよび不安定性の平均値を表1に示した。自尊感情の高さおよび不安定性それぞれを従属変数として，自尊感情の高さ2（高・低）×自尊感情の不安定性2（高・低）の分散分析を行った。自尊感情

表1 自尊感情の高さおよび不安定性の平均値

自尊感情の高さ 自尊感情の不安定性 <i>n</i>	高		低	
	高 21	低 34	高 34	低 15
自尊感情の高さ	30.1 (2.0)	30.6 (2.1)	22.7 (3.0)	24.9 (2.3)
自尊感情の不安定性	53.3 (4.1)	43.5 (3.9)	55.4 (3.8)	45.4 (2.9)

()内はSD

の高さについては，自尊感情の高さの主効果のみが有意であり ($F_{(1,100)}=159.63, p<.01$)，自尊感情の高さ高群 ($M=30.4, SD=2.1$) の方が低群 ($M=23.4, SD=3.0$) よりも自尊感情の高さが高いことが示された。自尊感情の不安定性については，自尊感情の不安定性の主効果のみが有意であり ($F_{(1,100)}=155.28, p<.01$)，自尊感情の不安定性高群 ($M=54.6, SD=4.0$) の方が低群 ($M=44.1, SD=3.7$) よりも自尊感情の不安定性が高いことが示された。

自尊感情の高さ高群は自尊感情の高さのみが低群よりも高く、自尊感情の不安定性高群は自尊感情の不安定性のみ低群よりも高いことが示されたため、自尊感情の高さおよび不安定性の群分けが有効であったとみなした。

課題遂行の結果の操作の妥当性

「課題遂行の結果は自分にとって望ましいものであった」という項目への回答の平均値は1.8($SD=0.63$)であった。理論的中央値3との差について t 検定を行った結果、有意な差が認められた($t_{(103)}=21.37, p<.01$)。

各群の回答の平均値を表2に示した。自尊感情の高さ2×自尊感情の不安定性2の分散分析を行った。その結果、自尊感情の高さの主効果のみ有意であり($F_{(1,100)}=5.77, p<.01$)、自尊感情の高さ高群($M=2.0, SD=0.6$)の方が低群($M=1.7, SD=0.6$)よりも平均値が高いことが示された。

自尊感情の高さ高群の方が低群よりも、課題遂行の結果は自分にとって望ましいものであると感じていたものの、実験参加者は全体として、課題遂行の結果を望ましくないものであると感じていたことが示されたため、課題遂行の結果の操作は有効であったとみなした。

表2 課題遂行結果の望ましさをの平均値

自尊感情の高さ	高		低	
	高	低	高	低
自尊感情の不安定性				
課題遂行の結果の望ましき	1.9	2.0	1.7	1.7
	(0.6)	(0.6)	(0.6)	(0.6)

()内は SD

原因帰属

内的・統制可能な原因については2項目への回答の平均値、内的・統制不可能な原因については1項目への回答をそのまま、外的・統制不可能な原因については3項目への回答の平均値を分析に用いた。各群の原因帰属の平均値を図1に示した。各指標を従属変数として、自尊感情の高さ2×自尊感情の不安定性2の分散分析を行った。

内的・統制可能な原因および内的・統制不可能な原因についてはいずれも、自尊感情の高さの主効果の有意傾向のみが認められ(内的・統制可能: $F_{(1,100)}=3.73$; 内的・統制不可能: $F_{(1,100)}=3.93$, いずれも $p<.10$)、自尊感情の高さ低群(内的・統制可能: $M=2.4, SD=0.7$; 内的・統制不可能: $M=3.5, SD=0.9$)の方が高群(内的・統制可能: $M=2.2, SD=0.6$; 内的・統制不可能: $M=3.0, SD=1.1$)よりも平均値が高い傾向にあることが示された。

外的・統制不可能な原因については、有意な交互作用のみが認められた($F_{(1,100)}=4.20, p<.05$)。

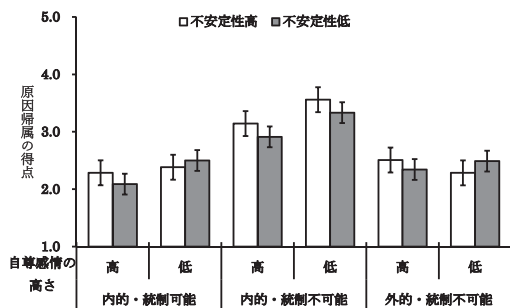


図1 各群の原因帰属の平均値

単純主効果検定の結果、自尊感情の不安定性高群において、自尊感情の高さ高群($M=2.5$, $SD=0.4$)の方が低群($M=2.3$, $SD=0.4$)よりも平均値が高い傾向にあることが示された($F_{(1,100)}=3.06$, $p<.10$)。

失敗の捉え方

失敗のネガティブ感情価、失敗からの学習可能性、失敗回避欲求、および失敗の発生可能性について、それぞれ3項目への回答の平均値を指標とした。群ごとの平均値を図2に示した。各指標を従属変数として、自尊感情の高さ2×自尊感情の不安定性2の分散分析を行った。

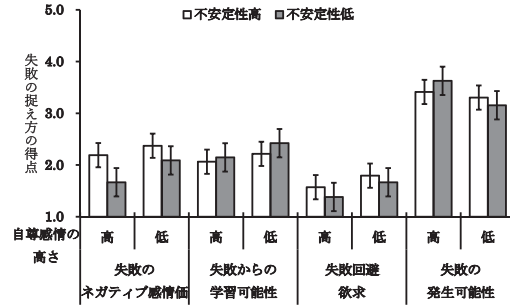


図2 各群の失敗の捉え方の平均値

失敗のネガティブ感情価については、自尊感情の高さの主効果に有意傾向が認められ($F_{(1,100)}=3.89$, $p<.10$), 自尊感情の高さ低群($M=2.3$, $SD=0.9$)の方が高群($M=1.9$, $SD=0.6$)よりも平均値が高い傾向にあることが示された。また、自尊感情の不安定性の有意な主効果が認められ($F_{(1,100)}=6.95$, $p<.01$), 自尊感情の不安定性高群($M=2.3$, $SD=0.8$)の方が低群($M=1.8$, $SD=0.6$)よりも平均値が高いことが示された。有意な交互作用は認められなかった($F_{(1,100)}=0.62$, $n.s.$)。

失敗からの学習可能性および失敗回避欲求については、自尊感情の高さの主効果の有意傾向のみが認められ(失敗からの学習可能性: $F_{(1,100)}=2.76$; 失敗回避欲求: $F_{(1,100)}=3.40$, いずれも $p<.10$), 自尊感情の高さ低群(失敗からの学習可能性: $M=2.3$, $SD=0.6$; 失敗回避欲求: $M=1.8$, $SD=0.8$)の方が高群(失敗からの学習可能性: $M=2.1$, $SD=0.6$; 失敗回避欲求: $M=1.5$, $SD=0.5$)よりも平均値が高い傾向にあることが示された。

失敗の発生可能性については、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった($F_{(1,100)}=2.58$, $n.s.$; $F_{(1,100)}=0.03$, $n.s.$; $F_{(1,100)}=1.01$, $n.s.$)。

対処行動

積極的対処行動、消極的対処行動、および援助要請について、それぞれ3項目への回答の平均値を指標とした。群ごとの平均値を図3に示した。各指標を従属変数として、自尊感情の高さ2×自尊感情の不安定性2の分散分析を行った。

積極的対処行動については、自尊感情の不安定性の有意な主効果が認められ($F_{(1,100)}=4.09$,

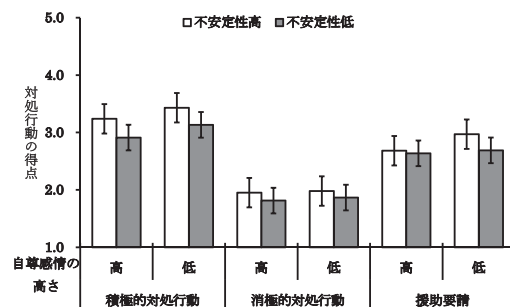


図3 各群の対処行動の平均値

$p < .05$), 自尊感情の不安定性高群 ($M=3.4, SD=0.7$) の方が低群 ($M=3.0.8, SD=0.7$) よりも平均値が高いことが示された。自尊感情の高さの主効果および交互作用は有意ではなかった ($F_{(1,100)}=1.81, n.s.$; $F_{(1,100)}=0.01, n.s.$)。

消極的対処行動および援助要請については、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった (消極的対処行動: $F_{(1,100)}=0.13, n.s.$; $F_{(1,100)}=1.25, n.s.$; $F_{(1,100)}=0.01, n.s.$; 援助要請: $F_{(1,100)}=0.94, n.s.$; $F_{(1,100)}=0.88, n.s.$; $F_{(1,100)}=0.46, n.s.$)。

考 察

本研究の目的は、自尊感情の高さおよび不安定性が失敗の原因帰属や捉え方、ならびに対処行動に及ぼす影響を検討することであった。

原因帰属

失敗の原因について、自尊感情の低い者の方が高い者よりも、自己の努力や能力など、それが統制可能であれ不可能であれ、内的なものに帰属する傾向にあり、予想と一致する傾向が見られた。自尊感情が低い者は、ネガティブな出来事である失敗をそのまま自己に取り入れることが示唆されている (調・高橋, 2002)。自尊感情が低い者は、失敗の経験も自己に取り入れ、自分自身に原因があるとみなしたのではないかと考えられる。

また、自尊感情が不安定な場合には、自尊感情が高い者の方が低い者よりも、課題の困難さや運などの外的で統制不可能なものに帰属する傾向にあった。自尊感情が高くても不安定な者は、自尊感情の低下を防ぐために、ネガティブな出来事を内的に帰属するのを回避するが、自尊感情が低く不安定な者は、現状を変えようと行動する傾向があることが示唆されている (André & Lelord, 1999 高野訳 2013)。自尊感情が高く不安定な者にとって、失敗の原因を内的に帰属することは、自尊感情に対する脅威となる。一方、自尊感情が低く不安定な者にとって、失敗の原因を外的に帰属することは、現状の変更が困難であることを意味する。そのため、自尊感情が高くても不安定な者は、外的で統制不可能なものに失敗の原因を帰属する傾向を強めた、あるいは自尊感情が低く不安定な者は、そのように帰属する傾向を弱めたのではないかと考えられる。

失敗の捉え方

自尊感情が低い者の方が高い者よりも、失敗をネガティブな感情を喚起させ、可能な限り回避したいもの、すなわちネガティブなものとして捉える傾向にあり、予想と一致する傾向が見られた。自尊感情が低い者は、失敗を自己と関連付け、よりネガティブに捉えたのではないか

と考えられる。

その一方で、自尊感情が低い者は高い者よりも、失敗を学習の機会として捉える傾向にあった。すなわち、自尊感情が低い者は失敗を単にネガティブに捉えるだけでなく、ポジティブにも捉えており、予想に反する傾向が見られた。自尊感情が低い者は、他者からネガティブな反応を受けたとき、ネガティブな感情を喚起させるが、それを自己に取り入れ改善しようとすることが示唆されている (André & Lelord 1999 高野 訳 2013)。本研究でも、自尊感情が低い者は、失敗を行動の改善のきっかけとして捉えようとする傾向が強かったのではないかと考えられる。

また、自尊感情が不安定な者の方が安定している者より、失敗をネガティブな感情を喚起させるものとして捉えていた。自尊感情が不安定な者は、出来事への感受性が高いことが示されており (中間・小塩, 2007)、失敗というネガティブな出来事を深刻に受け止めたのではないかと考えられる。

対処行動

自尊感情が高い者は失敗に積極的に対処し、自尊感情が低い者は消極的に対処すると予想していたが、積極的および消極的対処行動に対する自尊感情の高さの効果は見られなかった。自尊感情の不安定性の影響は見られ、不安定な者の方が安定している者よりも、失敗を引き起こした原因を直視し、それを克服するために積極的な対処しようとしていた。自尊感情が不安定であるということは、自己価値が他者との比較や外的基準に依拠する程度が高いということであるが、それと同時に、行動の改善によって自己価値が向上する可能性を感じさせることなのではないか。つまり、自尊感情が不安定な者は、失敗を経験しても自らの行動を改善すれば成功する可能性があると考え、積極的に対処しようとしたのではないだろうか。

また自尊感情が高い場合には、それが安定している者の方が、自尊感情が低い場合には、それが不安定な者の方が援助要請を多く行うと予想していたが、援助要請に対する自尊感情の高さ、不安定性、およびそれらの交互作用は認められなかった。援助要請は様々なコストを伴う (高木, 1997)。そのため、援助要請を行うこと自体が自尊感情を低下させる脅威となる可能性がある。また本研究で用いた課題は、目隠しをした状態で、約8フィート離れた箱に、非利き手でボールを投げ入れるものであった。基本的に1人で行う課題であり、他者からの援助があったとしても成功する確率が高まるとは感じられなかったのではないかと考えられる。そのため、自尊感情の様態によって援助要請に差異が見られなかったのではないだろうか。

本研究の課題と効用

本研究では、課題遂行の結果が平均よりも低いものであったことを実験参加者に伝えること

で、失敗を経験させた。すべての実験参加者は、課題遂行の結果が自分にとって望ましいものではなかったと感じていたが、自尊感情が低い者の方が高い者よりも、望ましくないものであると感じていた。つまり、自尊感情が低い者の方が課題遂行の結果と期待される成果との乖離を大きく感じていた可能性がある。課題遂行の結果と当初の目的との乖離が大きいほど、失敗のインパクトは大きくなることが予想される。そのため、本研究で見られた自尊感情の高さの効果に、自尊感情の高さそのもの以外に、自尊感情の高さによって失敗と感ずる程度が異なった効果が含まれる可能性がある。失敗と感ずる程度を十分にコントロールした上での検討がさらに必要である。

また本研究で用いた課題は、実験参加者にとって新規で不慣れな課題であり、失敗の可能性を高く見積もりやすい課題であったのではないかと考えられる。また、人生における大きな失敗のように強いストレスを伴うものではなく、対人関係や大学生にとっての学業のように自己との関連性も高くなかった。そのため、失敗することのインパクトが大きくなかった可能性がある。集団の一員として課題に取り組む、あるいは自己の能力が直接反映されるような課題に取り組むなど、失敗の深刻度が大きい課題での検討も必要である。

さらに本研究において、対処行動については実行されたものではなく、その実行意図を測定した。対処行動を意図してから実行するまでの過程には、いくつかの要因が作用しており、意図したからといって実行されるとは限らない。実際に援助要請が実行されるまでの過程も検討する必要があるだろう。

以上のように、いくつかの課題はあるものの、本研究の結果から、課題遂行に失敗したときに、自尊感情が低い者はその原因を内的に帰属し、ネガティブなものとして捉える一方で、学習の機会として捉えようとする、自尊感情が不安定な者は、失敗をネガティブなものとして捉えるが、失敗に積極的に対処しようとするのが示唆された。自尊感情が低い者は、自分が成功したとっていないときにポジティブなフィードバックを受けると、否定的に反応することが示唆されている（黒川, 2020）。不慣れな課題に取り組むなどして自己評価や自信が低下している者に対しても、目標に達していない事実に向けさせることが、失敗の経験を自己の学習や成長につなげるためには必要であることが窺える。

謝 辞

本研究はJSPS科研費JP20K03309の助成を受け行われた。

引用文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. (1978). Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87, 49-74.
- André, C. & Lelord, F. (1999). *L'estime de soi*. Éditions Odile Jacob.
- (アンドレ, C. & ルロール, F. 高野 優 (訳) (2013). 自己評価の心理学—なぜあの人は自分に自信があるのか— 紀伊国屋書店)
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Crocker, J. & Park, L. E. (2004). The costly pursuit of self-esteem. *Psychological Bulletin*, 130, 392-414.
- Dweck, C. S., & Reppucci, N. D. (1973). Learned helplessness and reinforcement responsibility in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 109-116.
- Edmondson, A. C. (2004). Learning from failure in health care: frequent opportunities, pervasive barriers. *Quality and Safety in Health Care*, 13, 111-119.
- 市村美帆 (2011). 自尊感情の高さと変動性の2側面と自尊感情低下後の回復行動との関連 心理学研究, 82, 362-369.
- 池田 浩・三沢 良 (2012). 失敗に対する価値観の構造—失敗観尺度の開発— 教育心理学研究, 60, 367-379.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006). 大学生の主體的な自己形成を支える自己感情の検討—本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して— 教育心理学研究, 54, 222-232.
- 黒川光流 (2020) ポジティブ・フィードバックに対する反応に自尊感情および評価基準のずれが及ぼす影響 富山大学人文学部紀要, 73, 67-77.
- 三宅幹子 (2000). 特性的自己効力感とネガティブな出来事に対する原因帰属および対処行動 性格心理学研究, 9, 1-10.
- 中間玲子・小塩真司 (2007). 自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題 福島大学研究年報, 3, 1-10.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Seligman, M. E. P. (1972). Learned helplessness. *Annals Review of Medicine*, 23, 407-412.
- 調 優子・高橋靖恵 (2002). 青年期における対人不安意識に関する研究—自尊心, 他者評価に対する反応との関連から— 九州大学心理学研究, 3, 229-236.
- 高木 修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, 29, 1-21.
- 田村修一・石隈利紀 (2001). 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究—バーンアウトとの関連に焦点をあてて— 教育心理学研究, 49, 438-448.
- 脇本竜太郎 (2008). 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 47, 160-168.
- 山本眞理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

